

まえがき

わたしたちは、文化的背景の異なる他者といかにしてともに生きていくことができるのだろうか。

この大きな問いは、筆者が大学で学び始めたときから今に至るまで、日本にしようと、ドイツをはじめ、他のヨーロッパ諸国にしようと、常に向き合い続けてきた課題である。そして、多文化社会となって久しい欧米諸国や多文化化が着実に進捗している日本が向き合わなくてはならない課題でもある。筆者は、もともとは日本における外国人問題に対する関心から出発し、そこからドイツにおける外国人・移民に対する教育施策と支援の実際に関心を持ち、ドイツの異文化間教育を学び、研究を進めてきた。それゆえ、日本社会の多文化化とそれに関わる教育課題を考えるにあたって、常にドイツにおける取り組みを参照してきた。そして、ドイツ調査時には筆者がドイツの現状について聞き取るのと同時に、日本における外国人問題や支援について問われ続けてきた。その際、筆者が大学院時代から関わってきた地域日本語教室や外国にルーツを持つ子どもたちのための進路ガイダンスでの経験を元に話をすると、ドイツ人の視点から見た日本における支援の良さを指摘されたり、気づかされることも多々あった。

こうしたやりとりや気づきは、本書で扱う事例である地域移民支援機関 R A A を中心に、支援の場に関わる人々と筆者との交流の中で得られたものである。R A A についての説明は本書の中で行っていくが、R A A は、ドイツ諸州の中でも歴史的に外国人労働者を多く受け入れ、移民の多い州であるノルトライン・ヴェストファーレン州における移民支援に欠くことのできない存在である。一九八〇年に設立され、二〇一二年には法改正を受けて発展し、新たな支援機関として州内に拡充している。

R A Aによる教育支援については、日本における他の研究者も注目しており、文献も散見されるが、その成立に至る背景、教育学における異文化間教育学の議論との関わり、その議論が影響を与えた組織の在り方、政策との関連などを含めて、まとまった研究はない。その意味においては、本研究は、一九八〇年代から今日に至るまで、ドイツにおける移民の統合政策の実効化に大きく寄与してきたR A Aという地域移民支援機関について総体的に捉えた初めてのものとなる。R A Aを対象にしなが、移民に対する教育支援を総体的に捉える試みは、これまでの日本における外国人支援、特に外国にルーツを持つ子どもたちへの支援を振り返り、そしてそれを前進させていくためのなんらかの示唆をもたらさうものだと考えている。

ドイツ教育学における異文化間教育学の議論が、移民の子どもたちによってもたらされた多様性をどのように受け止めようと試みたのか、実践現場はかれらを目の前にして、移民であると同時に現実社会のなかでドイツ社会の一員でもあるかれらに対して、どのように対応しようとしたのか。本書は、理論と実践が文化的背景の異なる他者にどのように向き合い、取り組もうとしたのかという点をドイツの事例から明らかにし、また、わたしたちの生きる社会における多文化の人々の支援を考えるための一助とすることも企図している。

ドイツの異文化間教育に関する研究は、天野正治編(1997)『ドイツの異文化間教育』(玉川大学出版部)が刊行されて以降、その研究動向や実践の動向を押さえた主立った研究書は管見の限りない。ささやかながらも、本書がドイツにおける異文化間教育や移民に対する教育支援についての関心を喚起し、理論研究及び実践研究の発展に寄与できればとの思いも込めている。

改めて、筆者の根源的問いである、「わたしたちは、文化的背景の異なる他者といかにしてともに生きていくことができるのだろうか」という問いをここに掲げておきたい。本書はこの問いに対する速やかな応答を目指したものではない。ドイツの実践現場においても、こうした問いに答えるための支援が容易に展開されてきたわけではな

い。本書はこの問いに対し、ドイツの異文化間教育に関する研究を志した者としての筆者の課題に対する向き合い方、関心、そして模索、また同時に日本において少なからず実践に関わる者としてドイツにおける支援を捉えようとする筆者のまなざしが、多文化共生社会のあり方やそれに資する支援のあり方についての議論を活性化する契機になることも目指している。